

列強の進出で弱体化する清朝



アヘン戦争に続くアロー戦争で、西欧列強の力に屈した清国は、近代化への改革に取り組まざるを得なくなった。

太平天国の鎮圧と洋務運動

太平天国に対しては中立の立場をとっていた列強だが、アロー戦争後は清朝から得た権益を守るため鎮圧に協力。曾國藩の湘勇や李鴻章の淮勇などの郷勇（民兵組織）を支援した結果、64年に太平天国は崩壊した。

太平天国は鎮圧したものの、続発する国内反乱などの内憂と、アヘン戦争やアロー戦争などの外患を抱えた清朝は、国内体制の改革を迫られることとなった。そして、曾國藩や李鴻章ら洋務派といわれた漢人官僚は、従来の制度はそのままに、軍事と生産技術の改革を行う洋務運動を展開。富国強兵や民間企業の育成に一定の成果を得て、同治中興とよばれる安定期を演出した。

内乱とアロー戦争によってますます弱体化する清

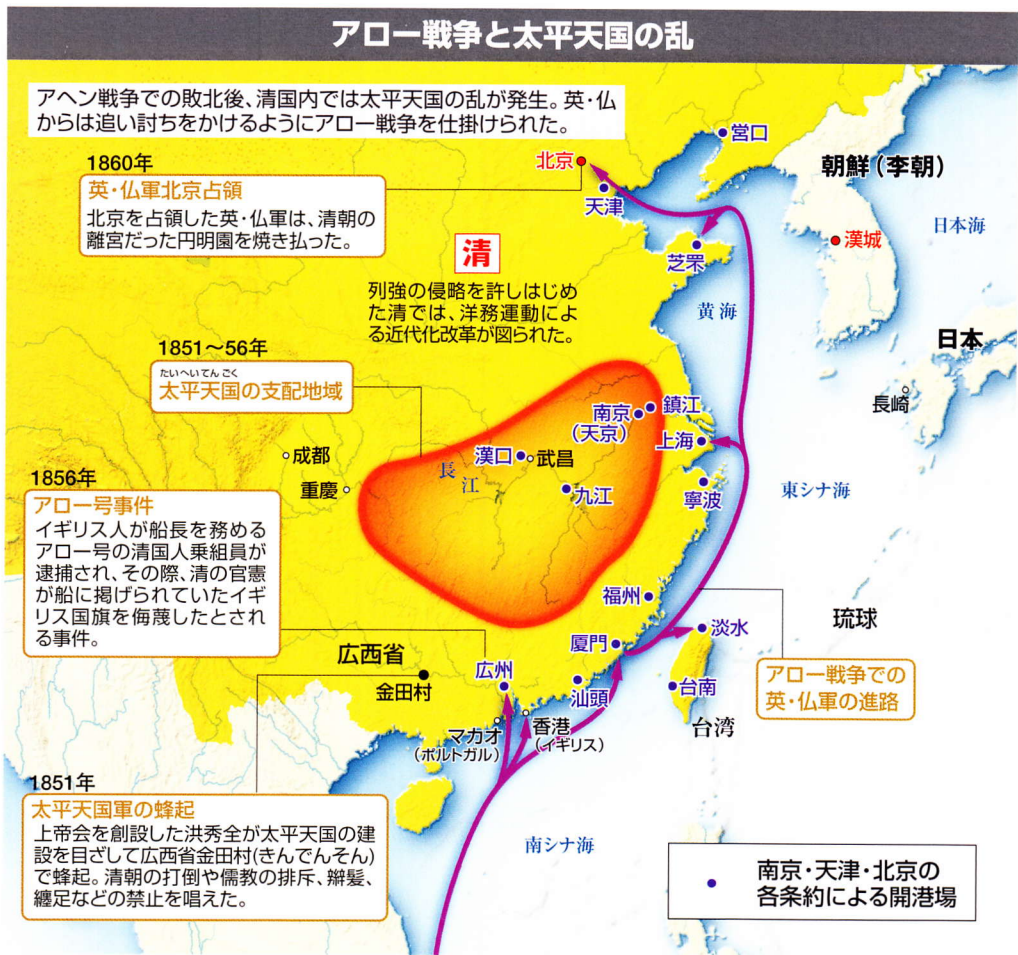
アヘン戦争の敗北で威信を失った清では、銀の流出による銀価の高騰などで税負担が重くなり、各地で抗租運動が激化した。また、1851年にはキリスト教と民間信仰を融合させた宗教結社（上帝会）を創設した洪秀全が、平等な世界を理想とする太平天国の建設を目ざして広西省で蜂起。「滅満興漢」を掲げて、清朝の打倒や辮髪、纏足の禁止を唱えたほか、男女に耕地を均分する天朝田畝制度を發布した。この蜂起は貧農などが加わって勢力を広げ、53年には南京を占領して天京と改めるにいった。

列強の侵略を許した中国古来の中華思想

中国の王朝は古来、自己を天下で唯一最高の中心と考える中華思想を持ち続けてきた。そのため、外国からの使節や貿易も朝貢という形でしか認めなかった。また、対等な国の存在を認めなかった。ここまでが中国だと限定する国境、あるいは領土という概念が希薄であった。こうしたことから、18世紀以降進出してきた西欧諸国ともなかなか対等な交流ができず、やがて列強による侵略を許すこととなった。

1861年の総理衙門設置は、中国が対等な外国の存在を認める外交を始めたという意味で、画期的なことであった。

アロー戦争と太平天国の乱



アヘン戦争での敗北後、清国内では太平天国の乱が発生。英・仏からは追い討ちをかけるようにアロー戦争を仕掛けられた。

1860年
英・仏軍北京占領
北京を占領した英・仏軍は、清朝の離宮だった円明園を焼き払った。

1851～56年
太平天国の支配地域

1856年
アロー号事件
イギリス人が船長を務めるアロー号の清国人乗組員が逮捕され、その際、清の官憲が船に掲げられていたイギリス国旗を侮辱したとされる事件。

1851年
太平天国軍の蜂起
上帝会を創設した洪秀全が太平天国の建設を目ざして広西省金田村（きんでんそん）で蜂起。清朝の打倒や儒教の排斥、辮髪、纏足などの禁止を唱えた。

南京・天津・北京の各条約による開港場